遠山記念館だより



源氏物語子の日図 (右隻部分) 狩野晴川院養信 天保12年 (1841)

右隻:101.1×363.2/左隻:100.1×363.2 (cm)

◇◇館蔵品紹介◇◇

遠山記念館で所蔵する「源氏物語子の日図(子の日 屏風図)」は、近世狩野派が制作した源氏物語絵の傑 作として、専門家の間で高い評価を得ている作品である。 金地の屏風は、八曲一双という珍しい形式で作られており、高さも約1mとやや低い。この型式は、徳川将軍家内 では「腰屏風」と呼ばれていたらしい。その両隻に、極 彩色により平安貴族の邸宅が描かれている。

右隻(図2)は画面向かって右側に、欄竿と御簾を備えた、寝殿造りの邸宅を描く。その左側に広がる金地に鑓水と朱塗りの反橋を配し、庭園としている。庭園には紅白の梅が開花していることから早春であることが示され、庭を散策する女性たちが若松を根から引き抜いている場面が描かれている。これは平安時代に正月

に行われた「小松引」と呼ばれる遊びで、引き抜いた根の長さで長寿を占うというものである。『源氏物語』第23帖「初音」にはこの小松引の場面があり、邸内に座す東帯姿の男性が光源氏ということになる。

左隻(図1)では画面中央やや左寄りに主屋を配し、その右側には渡殿と対屋を配した、やはり貴族の邸宅である。邸宅の中では褥に座した東帯姿の男性の前に、五つの高坑が並べられている。左手前には銚子を持った女性が侍っており、酒を注いだところであることが示されている。こちらも「若菜摘」と呼ばれる、若菜を採って食し邪気を載うという正月の行事で、現在の七草粥の原型とされる。『源氏物語』第34帖「若菜上」に描かれる、光源氏の四十歳の賀ということになる。



図1 「源氏物語子の日図」 左隻(若菜摘)

この「小松引」と「若菜摘」は、共に正月最初の子の日に行われる行事であった。江戸時代には『源氏物語』に取材してこの二場面を組み合わせ、「子の日図」と称するようになる。正月や慶賀の席に飾る掛け軸、そして屏風の画題として定番となり、盛んに制作された。

このように多数制作された「子の日図」の中で、本作の特徴となっているのは、その材料の豪華さである。本紙に貼られた金箔はまばゆい輝きを放ち、純度の高い金が用いられたことが見て取れる。また邸内の鑓水に用いられた群青を始め、岩絵の具も極めて上質のものが用いられている。さらに背面も金地とし、緑青を用いた「若松図」が描かれている(図3)。

また本作には、両隻に「晴川院法印養信筆」の落款(図4)が入っており(背面は「晴川院法印筆」)、木挽町狩野家9代である狩野養信(晴川院、1796~1846)の作であることが確認できる。養信は幕府の御用を務める傍ら、弟子たちを各地方へ派遣して大量の摸本を作成し、古典学習に励んだ当主として知られる。本作も人物や邸宅の表現には平安時代からつづく源氏物語絵の学習成果が発揮されており、ことに庭園で遊ぶ女性たちの装束の華やかさが素晴らしい(図5)。

なお本作の箱は長持形で、全体を拭漆で塗り、隅などを鉄金具で補強、内側は和紙張りにするという、実に重厚な作りである。蓋表には「御腰屏風 壱双」と記され、「屏/第六號/八折壹双/晴川法印筆」という貼紙の他、「聖印」という見なれない貼紙がある(図6)。「壱双」の字の下にもう一枚の貼紙があったが、現在は剝がされてしまっており、これは来歴を抹消した痕跡に見える。

・鷹司任子の婚礼道具

本作が美術史的、歴史的に重要なのは、制作年が確定できる近世狩野派の基準作という点、さらに徳川将軍家の婚礼調度であるという点である。昭和59年(1884)、小林忠氏(岡田美術館館長、当館評議員)が狩野養信の『公用日記』(東京国立博物館蔵)に、本作に関する



図3 「若松図」左隻背面





図4 左隻落款印章(左:表面、右:背面)

記述があることを指摘した。すなわち天保12年(1841) 11月21日条に「一御入輿御用腰屏風両面余認出来。今日出ス」と記されており、この年に将軍世子徳川家祥(後の13代将軍家定)と婚礼をあげた鷹司任子(天親院)の婚礼道具の一部であったと位置付けたのである。

任子は鷹司政熙の23女で、初名は有君。文政11年(1828)、6歳の時に婚約が成立し、3年後の天保2年(1831)9月15日には既に江戸城本丸へ入っている。そして10年間を本丸大奥で過ごした後、同12年11月6日に将軍世子の住む西の丸御殿へと移り、11月21日に婚儀が行われた。このように婚約から婚儀まで実に13年の月日があり、この間に種々の婚礼道具が仕立てられたのである。先に見た通り、本作もこの婚儀に間に合うように制



図2 「源氏物語子の日図」 右隻(小松引)

作されたことがわかる。

任子は容姿と人柄に優れ、奥女中のみならず義父である家慶とも良好な関係を築いていた。しかし嘉永元年(1848)に、疱瘡によって26歳の若さで死去してしまう。家定は翌年、継室として一条秀子(澄心院)を迎えたが、秀子も半年で死去。そして将軍職に就いて本丸に移った3年後、改めて迎えたのが近衛敬子(天璋院)であった。その出自は鹿児島藩主島津斉彬の養女であり、一般には篤姫の名前で知られている。

さて、本作のような将軍家に関連する婚礼調度用の制 作を、狩野家では特に「入輿御用」と呼んでいた。特に 平安王朝をしのばせる源氏絵は婚礼調度に好まれた意 匠で、養信による類品としては法然寺(香川県高松市)の 「源氏物語図屏風」(重要文化財)、林原美術館の「源 氏物語(紅葉賀)浜松図両面屏風」が知られる。中でも 法然寺の屏風は本作と同じ腰屏風の形式で、文政9年 (1826)に将軍家斉の16女である文姫が、高松藩世子 松平頼胤に輿入した際の婚礼調度であり、没後に菩提 寺である法然寺へと寄進された。右隻は本作と共通する 「若菜」、左隻は第7帖に取材した「紅葉賀」として春秋 を描き分け、裏面には「若竹図」を描いている。ただし本 作と比べると登場人物が多く、構図全体でやや煩雑な印 象がある。本作はモチーフを制限して金地を活かし、画 面両端に松樹を配して空間を引き締めている。さらに右 隻では縁側を斜線で、左隻では水平線で表して対比し、 その間の庭園をつなげる工夫は秀逸で、養信が構図法 を洗練させていた様子が見て取れる。

・「子の日図」の来歴

本作についてはその来歴に気になる点がある。かつて遠山記念館の台帳では、本作を伊達家伝来としていた。おそらく遠山元一が購入した際に、納品先からそう説明されたものだろう。しかし昭和3年(1928)の『公爵島津家蔵品入札目録』に「晴川院 金地着色源氏絵八枚折屛風/裏金地若松」の一文を発見し、掲載され



図5 「源氏物語子の日図」 右隻部分

ている写真と照合したところ、本作であると確認できた。 これにより来歴は島津家旧蔵と改めることになったが、で は本作が島津家に入ったのは何時なのだろうか。

そもそも本作は、任子の婚礼道具として江戸城西の 丸に持ち込まれ、基本的には任子が死去した後も将軍 家の財産として江戸城に残されたはずである。婚礼道 具は嫁ぎ先に残されるもので、大名家の例としては尾張 徳川家の「初音調度」(徳川美術館蔵、国宝)がよく知ら れる。また先の法然寺の例ように、下賜や寄進によって 分与される場合もあるが、その際には通常、箱等に由緒 が記録される。現在の箱にはその情報がなく、剥がされ た貼紙に記されていた可能性もある。

江戸城に残されていたとすれば、おそらく家定が本丸に移った後も、西の丸に保管されていたのだろう。そして江戸城では安政6年(1859)と文久3年(1863)と二度の大火があったが、この際にも運び出されて難を逃れたことになる。長持形の本作の箱は、まさに火災の際の退避に便利であっただろう。文久の大火の後はひとまず西の丸に御殿が再建され、将軍家茂の御座所も西の丸に移っている。そして本丸が再建されないまま、慶応3年(1866)に家茂が、第二次長州征伐の途中で、大坂城で死去した。新たに将軍となった徳川慶喜は、京都に滞在したまま大政奉還へといたる。このように江戸城は、将軍不在の状態で慶応4年、すなわち新政府軍への開城の年を迎える。そしてこの開城に際して、徳川家の什器が新政府軍によって持ち出されたという伝承がある。

• 江戸城開城

慶応4年正月に勃発した鳥羽伏見の戦いの後、慶喜 は船で江戸へと戻ってきた。田安徳川家当主である徳 川慶頼に全権を委任すると、慶喜自身は寛永寺に入っ て謹慎する。残された幕臣には交戦を主張する面々も いたが、勝海舟が西郷隆盛と交渉を行い、江戸城は無 血開城にいたる。4月4日には勅使である柳原前光、橋 本実梁らが江戸城に入り、開城を命じる勅書が慶頼に 渡された。この日から11日にかけての8日間、旧幕府の引っ 越しが行われている。再度の交渉の結果、御三卿であ る一橋家と清水家の二つ屋敷は幕府方に残され、篤姫 は一橋邸に、家茂正室の和宮(静寛院宮)は清水邸に 入っている(なお、田安邸は慶応元年に焼失しており、清 水邸に間借りしていた)。現在徳川記念財団で所蔵して いる篤姫や和宮の諸道具などは、この際に運び出され たものだろう。また遠山記念館で所蔵する「玉垣文琳」 と「大嶋肩衝」も、この時に運び出された将軍家宝物の 一部である。茶道具は権威の象徴という意味を帯びて おり、さらには武家の格式を示す刀剣や鎧のような武具 類も優先されたはずである。逆に言えば書画類や調度 品は後回しにされ、かさのはる屏風類は江戸城に残され ただろう。

この間の様子について、篤姫が新政府軍に徳川の威信を示すため、大奥を美々しく飾り付けて退去したという巷説がある。例えば『徳川の夫人たち続』では、篤姫に次のように語らせている。

「われら立ち退きしあとには、いずれも長州薩摩の 足軽上りの官軍の大将とやらが我もの顔に入城い たすであろうが、徳川将軍家三百年の威光を示し てその軽輩どもの眼を潰してやるために、いずこも 一切そのままに飾り置くようしかと頼むぞ」

これはフィクションであり、そのまま信じることはできないが、 大奥が飾り付けられていたことは、当時の回想文から確認できる。しばしば飾り付けに雪舟や狩野探幽があった としているのは、次の『定本江戸城大奥』の記述を参考 にしているだろう。

(退去の際) 扨て御休息、御座の間、御化粧の間、御対面所等へは壁に雪舟探幽筆の筆三幅対の軸を掛け、床に金銀製の鶴亀、或いは金銀製の万年青へ珊瑚八分玉の実十三個を結ばせたる、或は七賢人を彫刻して金の象嵌打ちたる銀瓶へ金赤銅の葉、珊瑚の実を結ばせし南天を挿みたるを置き、違棚へは梨子地の硯箱、香道具一式、古今、千載集その他蒔絵の碁盤などを据ゑ装飾に美麗を尽したれど(後略)

『定本江戸城大奥』は、明治三十年代に元大奥女中からの聞き取りを基にして編纂されたもので、ある程度の信用性は備えている。そして同書では、その他の宝物について次のように記す。

扨て座敷検めを終りて後ち倉庫を打開かせ、諸道 具類を見分して孰れも封印のまにて受渡しを遂げぬ。 特に「封印」という言葉が気になるが、これは他の資料 で裏付けが取れるのであろうか。実際に江戸城引き渡し が行われたのは4月11日、この時に立ち会った尾張藩軍 事奉行である水野忠雄の記録『江城請取顛末』が、徳 川林政史研究所に残されている。明治6年の記録とや や時代は下がるが、当事者の記録として信頼できるもの であり、道具類に関して次の取り決めであったことが記さ れる。

- 一櫓其外ニ有之道具類帳記引合之上萬/印付ケ 置引渡之事
- 一紅葉山ニ有之候霊牌ハ両山等ニ移し其他之/ 道具類ハ其儘之事

このように相当数の宝物が江戸城に残されたのであり、 「印」がつけられたと明記される。類例が確認できない ため断定は出来ないが、本作の箱にある「聖印」という 貼紙こそ、この「印」ではないだろうか。しかし問題とな るのは、この後である。

・上野戦争

江戸城を退去した旧幕臣 の集まりである「彰義隊」は、 当初は江戸市中の警備など を行っていたが、次第に不 満を募らせていく。新政府 は彰義隊を危険視するよう になり、旧幕府側も解散を要 求するがはねのけられ、その 結果として新政府軍による 寛永寺への攻撃、いわゆる 上野戦争へと至る。この際 に新政府軍の指揮権は、薩 摩の西郷隆盛から、長州の 大村益次郎へと移っている。 ただし当初から金銭難であっ た新政府では、軍資金の調 達が重要課題となった。そ の解決のため、一つには旧 幕府の軍艦購入資金25万 両が流用されている。そして



図6 箱蓋表

同時期に行われたというのが、大村らによる江戸城の什器の売却である。代表的な記述は、『大村益次郎先生事蹟』にある、船越衛の次の回想である。

それから臼砲を鋳立てる、多勢で総掛りと云ふ工合であつたが、何しろ一番困ることには金がない、太政官も貧乏極って居るし仕方がない、そこで西丸の宝蔵へ私と先生(大村益次郎)と毎日這入つたのだ、御用が済みさへすれば宝藏へ往て、何でも金気のあるものは、片端から引張り出した、銀瓶でも何でも構はぬ、取出して、銀座でそれを吹かして、一方で金を拵へる、さうして置て使うと云ふ有様で、其苦しみと云ふものは一通りではなかつた

船越は広島藩出身では、新政府軍では大村の下で軍務官権判事の役に就いていた。この回想は手柄話として語られており、道徳的な問題など感じている様子はない。また維新体験者の聞き取りをまとめた『漫談明治初年』には、旧幕臣であった前島密の回想として次の記述がある。

明治の初年財政の困難状態は別項にあるが、當時 獨逸商人に鐡砲三千挺を註文に及んだ。其の價が **壹萬五千圓であつた。扨て品物は到着したが、仕** 拂の金の調達が出來ぬ。そこで據なく現金で五千 圓を拂ひ壹萬圓は品物で渡すといふ窮策を取つた。 其品物は何かといふと、徳川氏の什器什具である。 勿論千代田城内には幾代の徳川氏が榮華を極めた、 其名殘の贅澤品は充ち滿てゐた。是等の品物を手 當り次第幾千點となく、大書院に陳列して、獨逸商 人を呼び寄せて之を見せ、サア之を一萬圓の抵當 にやるから引取れと命じた。彼是異議を云へば其の 儘に置かぬといふ劍幕だから商人は直ちに承知し たが、實に商人は恐悦であつたに相違ない、自分も 其の陳列された品物を一覧したが、なかなか立派な もので蒔繪ものや陶器や書畫や實に目を驚かすほど のもので、今などでは一品で何萬圓もするものが少く 無かつた。實に惜しいことを遣つたものだ。併し列品 の中には刀劍類は一つも無つた。刀劍は武士の魂 と云ふ念がまだあつた爲めと、當時はまだ價があつ た爲めに出さなかつたのだと語られた。

脚色された雰囲気もあるが、前島が刀剣類は一つもなかったと言及している点は注目される。先に述べたように、刀剣などの武具や茶道具は優先的に持ち出されていたはずであり、残った什器類が売却されたとすれば、それなりの整合性がある。

また大村と対立していたのが、薩摩藩出身で東海道 先鋒総督参謀の立場にあった海江田信義である。海江 田の回想録『維新前後實歴史傳』にも、広間に美術品が並べられていたという記述がある。江戸城引き渡しの 実務担当であった海江田は、大村らに対して次のように 抗議したという。

満室の器品は都て徳川氏の什寶たり、彼れ皆前日余か田安の臣に吩咐して庫内に封蔵せしめ、他日鎮静の時に至りて盡く回受すへきを命せし所なり、諸君切りに他人の器什を排出して、何等の所用かある、諸君は知らすや是の大城の朝廷に歸したるは、一に天下の大義を明にする所以にして、決して搏噬攘奪の事に非す、朝幕の間互に相協議して、歔欷嗚咽の中に受授せしものなることを、夫れ當非収受せし所の者は、専ら城池・兵器・軍艦・兵士・人民に係れるのみ、故に玩物類に属する者は、凡て収受すへきの限に非す、是を以て既に田安の家臣に命して、之を庫中に封蔵せしめたり、然るを漫りに倉庫を開封するか如きは、則ち之を掠奪物視するには非さるなきや、誤れるも亦甚し

このように複数の証言によって、新政府側が徳川家の什器を売却していた形跡が認められる(ただし海江田は実際の売却については言及していない)。本作がそこに含まれていたかどうかは断定できないが、明治6年までに持ち出されていたはずである。明治天皇の入城後、新たに「皇居」として利用されていた西の丸御殿は、明治6年の火災で焼失してしまうからである。

改めて考えてみると、狩野家が御用制作した屏風類は、基本的に将軍家からの嫁ぎ先等に伝わったものである。木挽町狩野家の他にも、中橋狩野家や住吉家などの御用絵師があり、その作品が江戸城にあったはずである。それらが上野戦争に前後して持ち出し、さらには明治6年の火災による焼失によって失われたのである。このため本作は奇跡的に残された、江戸城の荘厳を追慕させる遺品と言うことができるだろう。

(当館学芸課長 依田 徹)

参考文献

西河稱編『維新前後實歷史傳』啓成社、1913 村田峰次郎『大村益次郎先生事蹟』村田峰次郎、1919 同好史談会『漫談明治初年』春陽堂、1927 高柳金芳『史料徳川夫人伝』人物往来社、1967 永島今四郎,太田贇雄『定本江戸城大奥』人物往来社、1968 吉屋信子『徳川の夫人たち 続』朝日新聞社、1968 小林忠「狩野晴川院筆 源氏物語子の日図屛風」『古美術』71、 三彩社、1984

榊原悟「狩野晴川院筆『四季耕作図屛風』について―御用絵師の仕事―」『野村美術館紀要』6、野村美術館1997 『天璋院篤姫と皇女和宮』徳川美術館、2017

遠山記念館所蔵テラコッタ像付二輪車(中近東-土偶-228)の新発見

宮下佐江子(国士館大学イラク古代文化研究所特別研究員)

はじめに

重要文化財である遠山邸の佇まいからは想像しがたいのだが、実は遠山記念館の西アジア美術コレクションは、相当数にのぼる。なかでもエジプトのコプト裂、舗床モザイク、そして北メソポタミアのテラコッタ製土偶は古代西アジア展示専門館である古代オリエント博物館や岡山オリエント美術館などを凌ぐ質量であり、それらの博物館の特別企画展でも、たびたび貸し出されている。

2023年前期に開催された「遠山記念館のアヴァンギャルドたち―新収品の紹介をかねて―」では、フォンターナ、カポグロッシ、ピカソなどの20世紀の前衛美術家の作品と共に、東洋美術のアヴァンギャルドとして、古代シリア、北メソポタミアのテラコッタ像が39点も展示された。この時代のテラコッタ像が一堂に39点も展示されたことは、これまでになかったことである(図1)。



図1 「遠山記念館のアヴァンギャルドたち |展示風景

西アジア美術を専門とする我々にとっては、これらをアヴァンギャルドという新しい視点で取り上げ、多くの方々の眼に触れる機会が与えられたことは大変嬉しいこと

であった。そして、これらをあらためて精査させていただくと、思わぬものを見出すことができた。この時代のテラコッタ像において今まで報告されていないものに出会ったのである(図2)。



図2 二輪車 中近東-土偶-228 遠山記念館蔵

では先ず、その話に入る前に、北シリアのテラコッタ 像について、簡単に述べておこう。

北シリアのテラコッタ像

前2000年紀の南東トルコから北シリアにかけての遺跡の多くは農耕牧畜に依拠する小規模無文字社会であるが、この地域からは、テラコッタ製の着衣(図3)、あるいは裸体の女性像(図4)、男性像(図5)、ヒツジ、牛などの四足獣、そして二輪車(図6)、四輪車(図7)の乗り物など破片を含めて多数出土している(1)。

これらは、家屋の床下に埋納された状態で発見されることが多い。人物像は家の守護神的神像、女神像である場合も考えられるが、多くは地域的な神への奉献者ではないかと推測されている(2)。動物像は、牛、ロバなどのほかに同定し難い四足獣で、人物が動物の背

中に立ち上がる(図8)、あるいは動物の背中に奉献用 と思われる容器を描出しているものもある(図9)(3)。

車輪の付く乗り物の出土例も多く、車輪を装着する 貫通孔の残存から、それらが二輪車、四輪車であった ことがわかっている。しかし、殆どの車台は破損しており、 スポークのないおそらく木製の板を組み合わせて使用 された車輪をモデルとしたミニチュアの車輪型土製品 は遺跡から車台とともに完全に組み合わされたかたち で出土することは稀である(4)。

これらが製作された意図については、今のところ、はっきりとした確証はないが、単なる玩具ではなく、その丁寧なつくりや出土状況から、ある種の宗教的儀礼に関係した埋納品とされている(5)。



図3 女性像 中近東-土偶-60 遠山記念館蔵



図4 女性像 中近東-土偶-68 遠山記念館蔵



図5 男性像 中近東-土偶-4 遠山記念館蔵



図6 二輪戦車 前2500年頃 ssc239 古代オリエント博物館蔵



図7 四輪戦車 前2500年頃 トルコ ガディアンテップ考古学博物館蔵



図8動物に乗る人物像 中近東-土偶-201 遠山記念館蔵



図9 容器を背負う動物(羊?)像 中近東-土偶-206 遠山記念館蔵



図10 二輪車 中近東-土偶-228 遠山記念館蔵

遠山記念館所蔵テラコッタ像付二輪車 中近東-十偶-228について

本稿で取り上げる中近東-土偶-228(図2、10)のテラコッタ製二輪車は、実は「遠山記念館のアヴンギャルドたち―新収品の紹介をかねて―」には展示されなかった。多くの女性像の展示を優先したので、車輪に乗る人物像の展示は二人の人物像が描出されている中近東-土偶-229(図17)のみをおこなった。229のテラコッタ像については後述するが、展示されなかったにもかかわらず、今回の新発見に辿りつけたのは、遠山記念館のテラコッタ像の全収蔵品を精査する機会を与えてくださったことによる。

中近東-土偶-228は、後部が立ち上がった平らな車台に、背もたれのない椅子に腰かけ、添付した丸い眼、ヒトのものではない動物の鼻と耳の顔をもち、首から下は人間のような肩で、膝の上に二本の腕を添えた像が乗っている二輪車である。この像の前面には牽引動物に接続する轅を差し込むと思われる円筒形の突起がみられる。

そして、最も大きな特徴は土製の2つの車輪を車台に 装着する、青銅製の釘状品が、貫通していることである。 このような青銅製品は、通常、衣服の前を留めるピンと 言われており、青銅、銀、金製のものが各地で出土して いるが、このように車輪に装着された例はおそらく類を みないものであろう。正面右側に円錐形の頂部(図11) がみられ、右から左側に挿し込んだと思われるが、左側 には車輪の脱落を押さえるように、円錐形の被り物、長 衣、両手を胸の前におく、あるいは口を押えたようにみえ る人物像が背面の丸い環で釘状品にはめ込まれている (図12、13)。このピンの長さは約12.0cm、頂部は径1.0 cm、高さは0.7cmである。この人物像の留め部分は長さ 2.3cm、最大径0.4cmである。 留め部分の材質は青銅製 のようにもみえるが、シャープな側面の形状から金属成 分を含んだ石製(金属の錆のようなものがみられる)とい うことも考えられる。

円錐形の被り物はメソポタミアの神につきものの角冠のようでもあるが、両手のポーズは奉納者にみられるものでもある。背中に丸い環を持つ人物像はこの時期のイランやシリアで散見する作例ではあるが、このようにピンにセットされたものはみいだせていない。

両手を膝に乗せたポーズをとる像は遠山記念館に数点所蔵されており(図14)、古代オリエント博物館が調査した北シリアのユーフラテス川沿いのテル・ルメイラ遺跡でも出土している(6)。動物面の作例は同時期のテラコッタ像にも描出されている(図15)。

遠山記念館所蔵の中近東-土偶-228作品の課題

各遺跡の発掘報告書に記載された二輪車、四輪車の土製品は殆ど破片で出土するにもかかわらず、大英博物館でもルーヴル美術館でも、古代オリエント博物館でも展示されているこの時代の二輪車、四輪車の模型品は車台と車輪がセットされ(車輪をつなぐ部材は、消



図11 二輪車(部分)中近東-土偶-228 遠山記念館蔵



図12 同上二輪車(部分)



図13 同上二輪車(部分)





図14 膝に手を乗せる男性像 中近東-土偶-104 遠山記念館蔵





図15 動物顔の像 中近東-土偶-107 遠山記念館蔵

失しているので、博物館展示の際には現代の棒状品で補っている)、時には幌がついているものもある(図16)。

この地域は1970年代にダム建設によって多くの遺跡が水没の危機に瀕したため、ユネスコの呼びかけで、世界中の考古学調査隊が発掘をおこなった。それまで、村の近辺に点在していた小山(西アジアの遺跡は数百年、あるいは数千年にわたって、同一の場所に形成されるので、丘状に盛り上がっている)に何かが埋まっていたと気づいた村人が調査の手が届かないところで、様々な遺物を掘り出し、古美術商の手に渡った。その際、ばらばらの車台や車輪を組み合わせて1つの形に仕立てられたことは大いに考えられる。

これらの評価は難しい。全くの偽物ではないが、最初の姿ではない。しかし、当時の社会生活の一つの様相であることは確かである。それは乗り物の模型だけではなく、頭部と胴部を故意に折られて埋納された人物像を再接合している多くの例にも共通している。

中近東-土偶-228作品のように車台に人物像が乗る発掘例はこれまでの考古学調査では報告されていない。さらに遠山記念館には今回の展覧会に出品されたテラコッタ像付二輪車中近東-土偶-229という作品もあるがこれは、2体の女性像が乗る極めて珍しいものである(図17)。

これも轅を差し込む円筒形の孔がみられ、車台の上には前面に上半身のみの女性像、中央部にY字形の形状ものが立ち上がり、その後ろに女性の全身像が乗っている。発掘例がないものが、全て近代の修復であるとははっきり言えないという問題に直面する。これらが、



図16 幌付四輪車 前2500年頃 ssc240 古代オリエント博物館蔵



図17 テラコッタ像付二輪車 中近東-土偶-229 遠山記念館蔵

最初から一体であったかどうかは、レントゲン撮影による 接合部の観察、様々な部分の胎土の分析をおこなって、 検証すれば、ある程度は推測できるかもしれない。

しかし、中近東-土偶-228に関しては、おそらく車輪と青銅製ピンは極めて稀な当初から一体の形状であったと考えられる。このピンは右方向から挿し込まれ、左側の留めの部分は、車輪の脱落を防ぐ位置にピンにぴったり合うかたちで、装着されているからである。車輪や車台の出土する遺跡からは、青銅製のピンも出土している(7)。それらのいくつかは、本来のピンとしての使用ではなく、車輪の脱落を防ぐ車軸として使われていた可能性を考えることができるだろう。しかし、本作例のような留めが共伴している例は見当たらない。

遠山記念館の中近東-土偶-228 テラコッタ像付二 輪車はこの時代の二輪車、四輪車について世界に新し い疑問を呈したものであるといえよう。

最後に本稿を執筆する際に古代オリエント博物館の 長年の同僚であった石田恵子氏には常に有益な助言 をいただき、深く感謝申し上げます。

註

- 1. シリアユーフラテス川中流域テル・ルメイラ遺跡の発掘に参加した石田恵子氏による指摘。
- 2. Ishida, K. et al. 2014, Orthmann, W.1990, Van Loon, Maurits N. 2001 などそれぞれの遺跡は、距離的にそれほど離れていないが、出土するテラコッタ製土偶の形状は近似するが、細部の表現は共通する部分は少ない。
- 3. Liebowitz, H. 1988, Van Loon, M.N. 2001.
- 4. Van Loon, M.N. 2001, pp. 347-379.
- Littauer, M.A. et al. 1973, pls. XLIV B, XLIV C, XLIV D. Littauer, M.A. et al. 1979, figs. 20, 26.
- 6. Liebowitz, H., pp. 27-32. これらのテラコッタ製人物像、乗り物のつくりは稚拙ではあるが、手の指先まで繊細に描出しており、ヘアスタイル、装身具も種々様々で、製作者のこだわりが感じられる。
- 7. Fugman, E., fig. 74 3E83, fig. 98 3C685, 3C683-687 は青銅製のピンで、頂部から1/3のところに孔がある。これは衣服に挿した際にこの孔に紐などを通して印章や護符を吊るしていたと思われる。中近東-土偶-238の青銅ピンにこうした孔があいているのかは確認できていない。Mootrgat, A. Abb. 10には、頂部が円錐形で孔のない青銅製ピンの出土例がある。

参考文献

- Fugman, E. 1958. *HAMA Fouilles et Recherches de La Foundation Carlsberg 1931-1938*, Copenhagen.
- Ishida, K. et al. 2014. Excavation at Tell Ali Al-Hajj Rumeilah: A Bronze-Iron Age Settlement on Syrian Euphrates, Tokyo.
- Liebowitz, H. 1988. *Terra-cotta Figurines and Model Vehicles* (Bibliotheca Mesopotamica 22), Malibu.
- Littauer, M. A. et al. 1973. "Early Metal Models of Wagons from The Levant", *LEVANT*, vol. V, pp. 102-126.
- Littauer, M. A. et al. 1979. Wheeled Vehicles and Ridden Animals in The Ancient Near East, Leiden.
- Mootrgat, A. 1960. "Tell Chuera", Les Annales Archeologiques de Syrie X, pp. 73-86.
- Orthmann, W. 1990. Tell Chuera Ausgrabungen der Max Freiherr von Oppenheim-Stiftung in Nordost-Syrien, Damaskus.
- Van Loon, M. N. 2001. SERENKAHIYE Final Report on the University of Chicago and University of Amsterdam Excavations in the Tabqa Reservoir, Northern Syria, 1967-1975, Istanbul.

テーマ展「子の日図屏風と宮廷文化」

3月20日(水・祝)~5月19日(日)

遠山記念館の所蔵する屛風「源氏物語子の日図」(p.1~5参照)は、鷹司任子が13代将軍徳川家定に興入れする際の婚礼調度の一つとして制作された作品です。その主題として紫式部『源氏物語』から、第23帖「初音」に描かれる小松引、そして第34帖「若菜上」の若菜摘という、二つの正月行事を描いています。本展では、皆さまに源氏物語の世界の一端を味わっていただけるよう、この屛風を中心に作品を選びました。

一つには、宮廷文化への憧憬を背景とする蒔絵作品です。中でも伝尾形光琳の蒔絵作品「野々宮蒔絵硯箱」は、第10帖「賢木」を暗示する作品です。また第32帖「梅枝」には「薫物」と呼ばれる香が登場しており、本展では遠山記念館の香道具を展示します。もう一つ、紫式部の時代には日本独自の仮名書の文化が発達しました。本展ではこれに合わせ、重要文化財「寸松庵色紙」をはじめとする平安時代の古筆の名品を展示いたします。



「寸松庵色紙」平安時代 11世紀 (展示期間 3/20~4/14)



「野々宮蒔絵硯箱」 江戸時代後期 19世紀



川之辺一朝「初音蒔絵十種香道具」明治時代 19-20世紀

・特別講座「源氏物語と美術―お伽草子から垣間見る―」

5月11日 (土) 午後1:30~3:00 講師: **上野友愛** (サントリー美術館・主任学芸員)

参加費:500円 定員:30名(先着) Zoom参加可能 お申し込み用アドレス:tkkk@e-kinenkan.com

「コレクション展 1」

6月1日(十:)~9月1日(日)

幅広いジャンルを持つ遠山記念館のコレクションの中から長次郎「黒楽茶碗 銘 巖」をはじめとする日本陶器の優品、それに長沢芦雪「山姥図」などの近世近 代の絵画、小袖などの染織作品を選んで展示します。



長次郎「黒楽茶碗 銘 巖」 桃山時代 16世紀



「矢筈口水指」備前 桃山-江戸時代前期 16-17世紀



長沢芦雪「山姥図」 江戸時代後期 19世紀 (展示期間 6/1~7/8)

●遠山家端午の節句飾り

遠山元一が長男一行(大正11年 生まれ)の初節句の祝いとして揃えた、端午の節句飾りです。毎年、雛壇飾り と同様、旧遠山邸の中棟大広間の次 の間に飾られます。その中には、人間 国宝の二代目平田郷陽や京都の大 木平蔵など名工の作品も含まれ、甲冑 飾りに、上段から鍾馗、神武天皇、日 本武尊、応神天皇、源為朝、加藤清 正など勇猛な姿の人形や飾り馬、また 金太郎など愛らしい人形が並びます。

2024年4月17日(水)~5月6日(月·祝)



●遠山邸2階 春の公開日 4月20日(土)

5月18日(土)

午前11:00~午後3:00 参加費:無料(入館料別途)



●ご来館のみなさまへ●

新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、以下の点にご協力をお願いいたします。

- ・倦怠感、発熱、咳等の自覚症状のある方は、ご来館をお 控えください。
- ・アルコール消毒にご協力をおねがいします。
- ・館内では、会話を控えめにし、周囲の方と距離を保ってく ださい。
- ・作品、展示ケース、壁や柱などにはお手を触れないでください。

利用案内

◇入館料

	一般	学 生
特別展	1,000円	800円
通常	800円	600円
邸宅・庭園のみ公開	600円	400円

※中学生以下は無料、団体20名以上は2割引き

◇開館 午前10:00~午後4:30(入館は午後4:00まで)

◇休館日 月曜日(月曜が祝日の場合は翌日)

及び4月16日(火)、5月8日(金)、7月9日(火)

◇邸宅、庭園のみ公開(展示替期間)

5月21日(火)~5月31日(金) 9月3日(火)~9月13日(金)

◇詳しい展覧会情報は下記をご覧ください。 URL https://www.e-kinenkan.com



電車・バスでのご来館の場合

- ●東武東上線・JR埼京線 川越駅
- ●西武新宿線 本川越駅 ●JR高崎線 桶川駅 いずれも「川越駅-桶川駅」間の東武バスで キケを与下車、徒歩15分

お車でのご来館の場合

- ●圏央道川島ICより7分
- ●川越方面から国道254号線の宮元町交差点を川島方面へ右折、 釘無橋を渡り最初の信号を左折、案内板に従って約10分

遠山記念館だより 第66号 2024年3月発行

編集発行 公益財団法人 遠山記念館

編集担当 久保木彰一

〒350-0128 埼玉県比企郡川島町白井沼675 TEL: 049-297-0007 FAX: 049-297-6951